

## 芸術教育研究会の設立にあたって

混沌としてきた 21 世紀は 20 世紀の常識や概念、価値感までも翻弄し、新たなる模索の中で全く新しい方向性を持ち始めている。

この 10 年だけでも予測をはるかに超える変化をもたらしている。

インターネット網の普及で、私たちを困む情報量は、10 年前の約 500 倍になったが、情報量が増える一方で、教育現場での芸術教育を取り巻く環境は偏った情報と古い概念から一向改まる気配がない。

欧米諸国のみならず、アジアでも韓国・中国が国家的な取り組みとして、アート・デザインを最重要視し、教育の現場でも体系的なプログラムでのアート・デザインの指導を行っている。にも関わらず、日本においては、芸術教育の時間数の大幅な削減、それに伴う専任教員の削減等の施策がとられており、特に重要な次代社会を背負う芸術の役割がどういものであるかがまるで語られずに済まされている。このグローバルな流れと日本の美術教育に留まらない教育全般の大きなズレに私たちは危機感を持たざるを得ない。

この状況を放置しては、もはや日本において国際競争力のあるアーティストやデザイナー、ひいては政治・経済の人材育成をすることはできない。

この現状は教育の現場だけの問題ではなく、また日本社会全体という漠然としたものが原因だけでもない。ただ小学校から大学まで教育現場での情報共有と最新の情報更新の仕組みができていないという教育現場の問題もその一因であると私たちは考える。

そこで、本学では、大学全入時代を迎えた社会で「学生募集」という切り口で限られた牌を奪いあうのではなく、これからの数十年を見据えた教育の取り組みに早急に着手しなければならぬと結論付けたのである。

日本各地で奮闘される高校・予備校の先生方のご意見を受け、別紙のような取組を今夏より開始したいと考える。関係諸氏の忌憚なきご意見を伺いつつ持続可能なシステム構築と、21 世紀を生きぬける方向付けの一步としたい。

まずは、ジュニアを育成する指導者の皆さんと最新のアート・デザインの情報を共有する場を設け、新たな指導法を学ぶ場を提供したい。そして、その中でプロのデザイナーやアーティストと指導者の交流を促し、削減される公教育現場における芸術教育を補完するため、地方の美術館を拠点に、系統だったアートやデザイン教育のネットワークと指導体制を組みあげることが目的とする。

その中で、「芸術は仕事にならない」という価値観が蔓延している日本社会に対して明確な問題解決策を提示し、国際競争力のある日本のクリエイター育成システムを皆さんとともに構築したいと考える。

社会のために芸術で何ができるか？未来の子どもたちのために芸術で何ができるか？

皆さんとともに、問題解決のための一步を手を繋いで踏み出したい。